

213 肝シンチフォトと腹腔鏡所見の比較検討
—特に肝硬変で小欠損像に呈するものについて—

岡山大学 医学部第一内科
○湯本泰弘 三谷 健 伊藤俊雄 長島秀夫
広島市民病院
柴田 醇 中川昌壮

検索対象：昭和47年より52年6月の間、病理組織学的に診断を確定した肝硬変128例、肝細胞癌48例、転移性肝癌26例。

方法：血清AFP、CEAはダイナボット社製のRIAキットを使用した。コンピューターシンチグラムは高速アダマル変換を基本とするジイデジタルフィルターを用いて処理した。腹腔鏡は新興光器製CL-2型を用いた。

結果：肝硬変128例中52例に小欠損像(直径3cm以下)を認めた。このうち29例が腹腔鏡検査で以下の如く明らかとなった。3例は肝細胞癌、5例が馬鈴薯肝9例が島田分類の500番台を示す結節製肝硬変(A'5例、B'4例)、12例は小葉大壊死後の肝線維化による大きい陥凹、2例は漏斗状肝、6例は左、右両葉の境界線上の部分的拡大、1例は転移性肝癌の小病巣、1例は小水泡を有するのう胞肝、3例は肋骨による圧痕、1例は血管腫がそれぞれ肝硬変に合併していた。その他の23例は成因が不明であった。一方肝細胞癌48例中肝シンチフォトにより43例が陽性であり、検出不能の5例中2例はコンピューターシンチグラム、サブトラクションシンチグラムにて陽性所見を得、のこり3例はAFPの経時的測定により肝細胞癌を疑い腹腔鏡検査下生検で確定診断を下した。転移性肝癌42例中36例はシンチフォトで陽性所見を示し、6例の陰性例はCEAが高値を示したことで疑いをもち腹腔鏡、血管造影で局所診断を行った。尚3例は開腹で診断を行った。

結論：肝硬変で肝シンチフォトに小欠損像を呈した53例中29例につき、腹腔鏡検査でその成因を明らかとす得た。

214 E.R.C.P, CT像と肝脾シンチグラム像について。

大阪医大 放射線科
○河合武司, 前田裕子, 米満 賛
間島行春, 西上英昭, 福田徹夫
金崎美樹, 赤木弘昭
一般消化器外科
岡田勝彦, 八木敦夫

〔目的〕

肝・脾疾患の診断を向上させる目的で肝・脾シンチグラムとE.R.C.P, C.T.像を併用し検討した。

〔使用装置及び方法〕

シンチグラムは中央演算処理装置を接続した二核種同時測定用のガンマーカメラを使用した。肝シンチグラムはTC-99m スズコロイド及びTC-99m Phytateを使用、脾シンチグラムはSe-75セレンメチオニンとIn-113m Liver Scanning Kitの同時使用しSubtractionシンチグラムを行った。

C.T. スキャンはEMI 5005/12を使用し1スライス20秒、1検査8スライスで、スライスの厚さは13mmです。対象は1977年2月から約5カ月間に行つたC.T. スキャン1040検査のうち肝臓を対象とした70検査で、肝シンチグラムとの併用は45例でした。脾は約20例でERCPとの併用は10例あり、これらを対象とした。

〔結語〕

肝・脾疾患の診断はシンチグラム、E.R.C.P, C.T. スキャンの三者の併用により向上するものと考えらる。